

[概要]

今日問題視される人口減少や少子高齢化によって、地域社会の機能低下とともに伝統文化や地域活動の保存・継承が困難になりつつある。本稿では、伝統的な地域活動のひとつである祭礼に注目し、現代の地域社会における祭礼の意味づけを考察することを目的とする。中世以来の港町の祭礼として発展してきた富山県射水市の放生津曳山行事を事例に、地域の歴史的変遷を概観したうえで曳山町の1つである古新町を取り上げて社会的・経済的・場所的・意識的側面から祭礼の運営基盤を明らかにした。現在も地縁による結び付きが強い古新町においても、人口規模の縮小による祭礼の運営基盤の変容がみられた。現在の祭礼を担う人々の中には、祭礼は住民のためのものであり伝統を大事にする以上に、継続することを第一に考えなければならないという意識が確認できた。この意識が運営基盤の変容をよしとしてきたからこそ現在もこの曳山行事が行われて続けているともいえる。しかし今後も人口減少による担い手不足は課題であり、祭礼の担い手が祭礼の意味を考え続けていくことがこれからの祭礼の在り方にとって重要である。

キーワード：祭礼，担い手不足，運営基盤，担い手の意識，保存・継承